

従つてこれらの点についての具体的な実証が望まれる。

第四に氏の研究に依つて中世が希望の時代となつた反面、暗黒は近世に移された観が無くもない。信長、秀吉の政策に一応の進歩性を認める私は、この点疑問を抱かざるを得ない。氏は勿論町人の中に微光を見出して居られるが、中世町衆と近世町人の夫々の社会に於ける存在形態の差違が追求される一方、近世が生んだすぐれた民衆文化の発掘を怠つてはならない。氏が引用された「すたる特世間にては却て茶湯繁昌と思ふべき也」^{六四}と言ふ利休の語は一応正しいにせよ、「茶湯繁昌と思ふ」のは何故かについても考うべき点が少くない。

然しこの提言は決して容易なものではない。また単に著者への願望ではなく、全歴史家への提唱である。唯私は中世文化を多面的プロテウスであつたとする相対主義を採る意図はない。以上の基礎研究を踏まえて中世文化の基調を——それが林屋氏と同じ結論を生むにせよ——再発見したいと考えるのである。そこに氏の労作を、中世暗黒時代説への

アンチテーゼに終らしめぬ為の後学の責務がある。

次に細かな点であるが、氏は平安時代に於ける仮名文字の發展が、民衆の言語の共通性を導き、民族意識の萌芽する地盤を培つたとし、草仮名の育成者を当時熱厲の境遇にあつた女性に求められた。この問題について歴史学研究会一九五一年度大会に於いて、氏は藤間生大、松本新八郎両氏と討議を交わされて居るが、草仮名の育成者を女性とする事に異論はない。但私はこの事実と、草仮名が民衆を連契する地盤を作つたと言う事の直接の結び付けは拒否したい。育成者は主に宮廷女官であり、彼女達の隷屬性もその限りに於ける隷屬性であり、彼女達はどうして容易に民衆と結び得たであろうか。更に仮名を高く評価する事自体についても、言語の共通性を導く契機は、言語の本質より見て、当然文字よりも発声言語に重点があると考える。

最後に氏は川島元次郎氏等の定説に従い、文禄元年秀吉御朱印船發遣説を採られ、角倉了以の海外雄飛を更に以前に遡及された^{四七}。此に氏に直接關係する問題でないかも知れぬ

が、岩生成一氏は文禄元年説を証拠付ける文書がより後年のものとして文禄元年説を否定され、その理由の一に、糸割符商人茶屋が加つて居る事を挙げられた。^{(御朱印發遣易家の性徳) (社会経済史学一七ノ二)} 私も岩生成説に同意するが、更に文禄元年説の証拠たる「長崎志」に「角倉一艘」とある角倉は、同様の事実を記した「長崎拾芥集」には「角倉与市」とある事を指摘したい。与市(一)が父了以に代つて朱印船貿易を営むのは、慶長十六年以後であつて、^(異聞御到底文) 文禄元年説は成立し難いと思ふ。

以上平素の御厚誼に甘えて妄言を連ねたが、未熟な紹介が氏の高説を誣るものがあつたとすれば御叱正をお願ひする。尚長友藤本康彦君等の手に成る索引が、本書の利用を益々便ならしめている事を付記する。(東京大学出版会刊、三九〇頁、五八〇円)

村山修一著

日本都市生活の源流

本書は中世都市としての京都について、都

市民殊に庶民階級を中心とした都市生活を、社会経済及び思想文化の両面より両者の有機的關係の下に考察し、併せて近世市民社会成立の歴史的素地を明らかにせんとする意圖の下に、新たに書下された三三〇頁に及ぶ大著であつて、十数年来中世京都の庶民生活を研究されて来た著者の全業績の集大成であると言へる。

中世都市の研究に關しては豊田武・原田伴彦両氏を始め先学の秀れた業績が多いが、それらが中世諸都市の形態・機能・組織等を比較研究的に取扱つてゐるのに対して、本書は専ら対象を京都という特殊な都市に限定し、その社会的・文化的諸現象を精密に追求したものである。殊に民間信仰としての怨靈思想・勸進聖・習合的信仰を叙述する章節等は、著者の最も造詣深い部門であるだけに大変興味深く生彩に満ちて周到に論及されてゐる。徒らに才智に著ることなく、着実な史料の蒐集と操作とに依つて、都市に於ける庶民生活の究明という困難な研究を完成されたことに對して深甚なる敬意を捧げたいと思ふ。

著者は先づ中世都市京都の母胎としての律

令的官僚都市平安京の誕生を説明して、平城京デスポティズムに依る財力と人力の都市集積が生み出す複雑な社会的諸矛盾に對して、当時の為政者が都鄙を超越した根本的な改革を検討する事なく、單なる政治的方便としての遷都に依つて解決せんとした事情を説くことより筆を起す。その結果平安京は前代以来の諸矛盾を揚棄することなく、その儘継受し、更に新たな時代の問題として集約的に表現しなければならぬ歴史的運命を負荷し、その為には遷都以後の政治も清新な実行力に乏しく、歴代の河川築堤の工事も一向に進捗せず、貴族社会の政權争奪を回る暗い政治的疑獄事件が相次いで起り律令政治を弛緩せしめてゆく。思想面に於いては政權争奪の犠牲者に對する同情と、政治に對する民衆的な批判が怨靈思想という歪められた姿態に表象され、御靈会を発生せしめ新興祭祀や民間宗教

家の活動する思想的素地を醸成すると共に神仏習合理論を推進し本地仏設定に基く無迹説を地方にも波及せしめ、経済面に於いては平安京内の口分田班給の事情や都鄙に對する賦課の不公平が近国農民の都内流入を將來し、

中央に志を失い地方に脱出する下級貴族の増大、民営商工業者の擡頭と相俟つて都市の人的構成を変化せしめる。社会不安は激化し、下層市民・下層僧侶等の集團的強盜・放火・愁訴・噉訴等は官僚公卿貴族の生活を脅かし、律令的都市經營を崩壊せしめ、政治経済・思想文化の両面に於ける庶民的世界を次第に拡大せしめる事情を中世京都の歴史として具體的な例証を以て説明する。

次いで著者は本篇「中世都市京都の展開」を七章四節に亘つて詳述してゆく。本篇は大別して三つの時期、即ち中世京都發足の時期としての鎌倉時代、古代的な權威に對する民衆の反抗が次第に熾烈化し中世的矛盾が増大する室町前半期、及び古代的權威も中世的社會秩序も崩壊して近世的市民活動の漸く盛んとなる室町後半期の三つに分けて考察されてゐる。

一概に「古代的律令的官僚都市」「中世的都市」と言葉の上では明瞭に區別し得ても、實際には都市自体に封建體制を打破する程の政治経済力が欠如して、秘密には古代都市とも封建都市とも言えない独自の性格を有

するものであつたと著者は論ずる。中世都市東部の発足は、摂関政治・院政の遺した多数の公卿貴族の奢侈的造営物の破却、洛中洛外諸大寺に対する群盜の跳梁、堂衆僧兵の都市治安の攪亂、東西両市に代る四条町・七条町を中心とした新たな商業地域の成長等に具体的に進展するが、古代的残滓は執拗に纏綿し鎌倉新仏教も都市民の宗教的関心を高揚させはしても、尚前代の因習を引く雑修者が多く、富裕なる土倉酒屋層の経済的進歩は顕著であつたとは言え、依然権門の被護の下に経済的地盤の保全を計る程度で都市自衛に關する彼等の積極的な自主的活動は殆んど見られないことを第六・第七章に互つて詳細に論証している。

次に著者は、室町前半期を、金融業者・商工業者の財力が都市経済を左右するまでに伸張し、都市文化が是等町人層を中心として新たな發展を遂げる一方、上層富裕階級と貧民階級との社会経済的対立が歴々一探的な暴動を惹起するに至る事情を中心として経済・文化の両面について考察する。当時の土一揆の構成分子は洛外郷民を主体とし、散所・乞

食法師・浮浪者等の下層町人が参加し、下級僧侶が煽動することもあり、その指揮者は守護の被官又はその下の代官乃至平民層であつた。洛中群盜は一揆起れば公然と参加し、平時は別に徒党を組んで民家に侵入し、殆んど一揆と差別をつけ難い、と著者は言う。

応仁の乱後、町人層は階級分化を遂げ、貧富の懸隔が増大して富裕なる上層町衆を成立せしめる。土一揆は益々大規模となり守護大名の被官・牢人等によつて指揮され足輕を主たる構成分子とするように変質し、群盜・辻切と共に都市治安を益々不安に陥れた。土倉は土一揆に対抗するための自衛組織を作り、町も上層町衆を中心とする自衛組織を結成する。一方階級の利害關係を同じくしない下層町人の富裕層に対する反感は時には一揆と合流して土倉を襲撃するという前後不整合な行動を彼等にとらせる。当時の熾烈なる一揆運動は一見階級闘争の性格を帯び乍ら、自覚的でなく前後矛盾した行動をとる町人層の向背は、中世的世界に住みつつ中世的世界を打破しようとする苦悩の時代の集約的表現に外ならない。そしてこの事は町人の精神生活と現

実生活との關係についても論証される。いかにも民主的世界を目指して活動したかに見える市民社会も、古代的残滓を執拗に保留して、要するに被治者としての世界の範圍内で新しい生活を求めようとしたものにすぎず、結局その活動も近世封建社会に組込まれるべき素地を形成する歴史的意義を荷つたものであつた。

具体的な事例を豊富に引用して詳細に論証されている本書の内容紹介としては極めて舌足らずであるが要約すれば以上の如くである。然し前著「鎌倉時代の庶民生活」の序文に唯物史観に基づくプロレタリアートの歴史研究の忠告と示唆を取入れ積極的に庶民大衆の生活に關する事象を広範に具体的に研究してゆきたいと述べた著者の態度が本書に於いて充分發展され得なかつた様に思える点も若干なくはない。都市土一揆が農村の土一揆と比較して頽廢的面を多分に内包する事は事実であるけれども、土一揆と盜犯等の犯罪とを同列において考察される事は無理ではないかと思う。都市土一揆の本質は、盜犯と混同される様な墮落的な現象にあるのではなく、如

何なる因由の下に惹起され、如何なる経過を辿りつつ形態変化を示してゆくかを具体的に追求することから考察されなければならぬ。文明十二年九月の土一揆の評価も著者の言う如く「率先して一揆の行動には出なくとも、他から一揆がおしよれば、どさくさにまぎれてみづからも一かせぎしようとする位の腹」をもつていた町人の下級層自身が、率先して富裕層と戦い始めた新たな傾向であつたのではない。

京中上下が土倉の質物を、五分一、三分一、半分の用途を出して引取つていふと言ふ長興宿禰記の記事から、寧ろ土倉と京中上下の間にはその種の功利的な契約の成立としていふ事が確実である。それは土倉が土一揆の被害を最少限度に喰止めようとした処置であり、その後、これまでの町人層の団結の力を考えれば、土倉のとつた処置は理解出来ない。と同時に、時には矢戦に及び死傷者を出してまで土一揆と合流するより、土倉との契約を可及的に有利に取結び、それを呑んだ町人層のやり方は、たとえ彼等には自覚的にその意志がなかつたにせよ、彼等の功利的な

行動は結果的には土一揆の土倉に対する襲撃を弱体化した間接的な妨害行為となつた。この時期を一つの起点とする土一揆と町人層との対決を前提としなければ、後の天文を頂点とする町人層と本願寺との決定的な対立を理解する事が困難となるのではないか。私は京都の土一揆を中心とする町人層の動向の基本的な理解は林屋辰三郎氏の説が正しいと考へるが、林屋氏が捨象された都市土一揆の腐敗面を著者が本書の中で強調された事も重要な提言である。元來消費生活の場である都市には農村に比して腐敗面が強大であることは言うまでもない。両氏の長を採り短を補つて始めて都市土一揆の全貌が明らかにされるのではなからうか。

日蓮宗が富裕な町人層を中心として京都に於いて確乎たる地盤を確立してゆく事情は著者の説明された通りであるが、下層社会にも浸透していた証拠として本能寺文書に見える非人風呂の存在を紹介しておきたい。その経営規模は文書の文面からは明らかでないが慈善的な意味を有する或る種の銭湯であつた事は推測されよう。日蓮宗が度重なる弾圧にも

拘らず京都に於ける地盤を確保し続け得る為には町人の財力と共に下層町人の力を考えねばならぬが、それと共にこんな事を論うのは本書が主として公卿日記によつて論じられていて、寺社文書を援用する事少いのに不満を有つてである。

今一つは、本書が極めて多岐に亙つて豊富な実例を引用しながら論証されているだけに後学の一人として醜を得て更に蜀を望む願の希望ではあるが、宝の山に入つて宝の所在を見失わないように巻尾に索引を附して頂きかつたと思う。そうすれば益々本書の価値を倍加させたであらうと残念でならない。本書の刊行後堀一郎氏の大著「我が国民開信仰史の研究」が公刊され、又黒田俊雄氏の本地垂迹説の新しい理解が提出され、(鎌倉仏教における本地垂迹史)本地垂迹説を始め、(二)日向尊修と「本地垂迹」史、(三)本地垂迹説を始め、(四)日蓮、一遍などの神祇観についても新たな考察の素材を得ている今日、本書にはそれ程詳しく触れられなかつた是等の問題についての著者の見解や、近世京都の都市生活についての研究が發表される日を期待したい。以上著者の所説を曲解して妄言を加えた点があれば幾重にもお詫びしたい。(昭和二十八年一月一日日開書院発行A5三二九頁三八〇円) 一石田善人